



富山は地震が少ない？

NPO 法人富山県自然保護協会
理事長 菊川 茂

富山県人には「県内では地震が少ない、起こらない」との思いの強い人が多いようです。確かに富山県内では、ここ数十年、大きな被害をもたらした地震が発生していません。これが富山県で地震が起きない、少ないとの思い込みに繋がっている主な原因のようです。

ところで、昨年（2016）の4月、熊本城の石垣を崩壊したり、阿蘇神社の社殿を倒壊させるなど、大きな被害をもたらした「熊本地震」のことを覚えておられることでしょう。

4月14日突如、熊本から大分にかけての北九州に、震度7の「激震」が連続して発生しました。多くの家屋が倒壊したり、地面の液状化で傾いた体育館や公民館など、マスコミを通じ、その様子を思い起こした方もあると思います。

丁度、現地調査のチャンスがあり、参加しました。そして、熊本は、地震が起きない地域であると教えられ、信じてきたのに、との話をよく聞きました。



崩壊した熊本城石垣

さらに、時々地震の発生した地域を訪ねることがあるのですが、その折り、必ずと言っていいほど、「ここは、地震のない地域である」と、信じてきたのに、との嘆き節を聞くことがよくあります。「地元には、地震が起こらない」伝説は、富山県人だけでなく、全国的に言えることのようにです。

安政の飛越地震

ところで、大きな被害をもたらした富山県内の地震を調べると「最近はなかっただけ」で、幾つも知られています。有名なものは「安政の飛越地震」です。

安政5年2月26日（1858年4月9日）午前2時頃、発生した「飛越地震」は「跡津川断層」と呼ばれる断層の活動によって起きた典型的な内陸直下地震でした。地震の規模については、従来マグニチュード7.0～7.1とされてきましたが、近年、被害の分布などをもとに再



常願寺川右岸にある大転石

検討が行われた結果マグニチュード7.3～7.6の大地震であったことが明らかになりました。

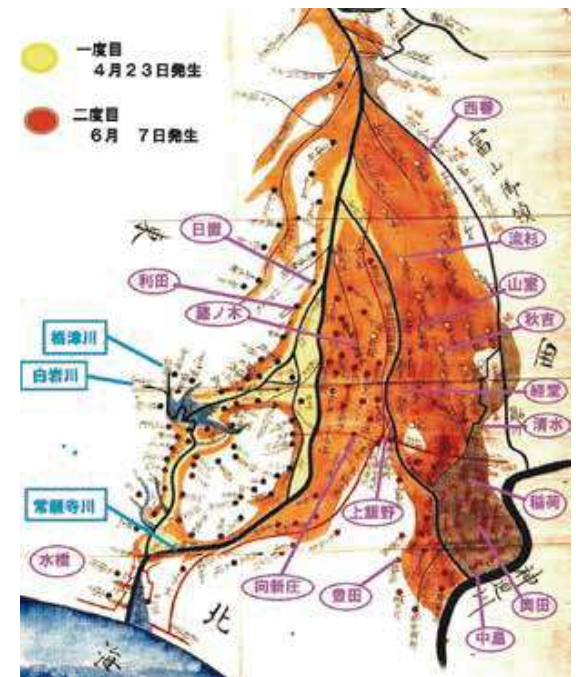
安政5年（1858）、遙かに遠い過去の出来事のようにですが、本年（2017）年から僅か159年前の出来事です。

飛越地震による被害は、越中から飛騨北部にかけて著しく、富山平野では、城下町富山で多くの家屋や土蔵などが被災したほか、各所で地盤の液状化による被害も生じています。

飛越地震の原因である跡津川断層は、山岳地帯を通っているため、山崩れや崖崩れが多発し、各所で崩壊した土砂が、川を堰き止めたり（ダム形成）、道が寸断されるなど、山地災害が顕著となっています。

立山カルデラを取り囲む山並の大鳶山、小鳶山が崩壊しました。現在でもこの崩れ跡が明瞭に残っています。

崩れ落ちた土砂は、立山温泉を埋め、丁度宿泊していた作業員36名が命を落としています。



安政五年常願寺川非常洪水山里変地之模様見取図
=滑川市立博物館所蔵「岩城家文書」より=
(※ 現地地名等 加筆してあります)

また、地震による崩壊土砂は、湯川や真川を堰き止め「天然ダム」を形成しました。

やがて天然ダムは2週間後の4月23日（旧暦3月10日）及び2ヶ月後6月7日（旧暦4月26日）に決壊、土石流となって富山平野を襲っています。4月の1回目天然ダムの決壊による土石流、及び6月の2回目の天然ダムの決壊による土石流の被害については下記のように纏められています。

倒壊数…2,496棟 死者…140名
被害者数…7350名

また、2回の土石流で流された大きな岩が富山平野に残っており「大転石」と呼ばれています。

土砂によってダムが形成され、やがて決壊され土石流となって富山平野を襲ったことを証拠立てるものです。

また、大鳶山、小鳶山の崩壊によって大量の不安定な土砂が、カルデラの底に崩れ落ち、堆積しています。その土砂量は、流されましたが、まだ2億㎡残っており、大雨ごとに富山平野へ土石流となってながれ、常願寺川が暴れ川となって人々を苦しめてきました。その対策として、100年以上も砂防工事が続けられています。

「地震は必ず来る」

地震は短い年月で見ると来る所、来ない所がありますが、長い期間で考えると必ず襲ってきて、止めることは不可能です。

同じ規模の地震でも、被害を少なくすることはできます。防災は可能です。

公助、共助、自助

公、地域、個人が協力して、防災について考え進みたいものです。